



「気象学と気象予報の 発達史」

堤之智 著

丸善出版, 2018年10月

342頁, 5,500円(税別)

ISBN 978-4-621-30335-1

本書は、タイトル通り、気象および気象予報に関わる歴史を扱っているが、その時代と時代とともに変わる当時の考え方(常識)まで幅広く眺めていて、中身の濃い本となっている。そのため330ページを超える分厚い本となっているが、気象学を専門とする学生・院生・研究者だけではなく、広く一般の読者にも勧めたい良書となっている。

本書の目次は、1. 古代ギリシャ自然哲学における気象学、2. ルネサンスによる古代ギリシャ自然哲学のほころび、3. 科学革命の中での気象学、4. 気象測定器などの発展、5. 気候のための観測網の設立と力学の大気循環への適用、6. 嵐の解明と気象警報の始まり、7. 近代日本での気象観測と暴風警報、8. 19世紀末の気象学の発展と気象予測の行き詰まり、9. 気象予測の科学化と気象学のベルゲン学派、10. 数値予報と気象科学の発展、11. 国際協力による気象学の発展、である。

天気予報は農業、漁業、交通、生活等に結び付き、昔から多くの人々が関心を持っていた。また平和時代だけではなく戦時には戦略に関わることであり、天気予報を事前に知る者はより有利となった。天気予報に関して国際協力のもとに人類の共有となった現在に至るまでの、紆余曲折した歴史が目次からいろいろと読み取れる。

本書には、物理学者のガリレイ、ケプラー、ヘルツ、ケルビン、植物学者のリンネ、文学者のゲーテなどの著名人から、天文学者、数学者、化学者、哲学者、建築家、医者、実業家、経済学者など数多くの人がでてくる。私も大学で学生に気象学を教えてい

たので、本書のような全体を見渡せる本がほしかった。恥ずかしながら、私自身はこれほどの登場人物の仕事までは把握していなかった。

本書からさまざまなことを学ぶことができた。ここでは、1章から学んだことだけを書く。英語では、気象学は meteorology であるが、流星・すい星は meteor である。両者は(現在であれば)まったく異なる概念であるが、どうして同じような言葉で表記するのか私には昔から不思議だった。本書から、それは古代ギリシャのアリストテレスの「二元的宇宙像」からきたらしいことが分かった。当時、宇宙は高尚で永久不変な「天上界」と通俗的で万物が変化する「地上界」に分けられていた。天上界とは月とそれより上の部分を指し、地上界とは月より下の部分であって、流星は地上界に含むとされていた。これから、meteor/meteorology は地上界の同じ概念としてとらえられたのであろう。

現在の気象学の知識から見ると、過去の知見ほどずれが大きくなるものである。その場合、当時の各人の意図した概念を読みとるのはかなり難しかったと思われる。堤氏はそれらを的確にまとめていて、すばらしい整理力を発揮した。先にあげた meteor の例と同様、断片的な知識が繋がり合う感覚を、本書全体を通じて読者も体験することと思う。

現在の天気予報は、地球規模から乱流まで、数時間先から数百年先までを目指す段階にきている。正確な予報のためには大気だけではなく、海洋、化学、水文、生物等まで視野にいれなければならない総合科学の時代となっている。その遂行のためには、国際協力は不可欠であり、それを支えるものとして、観測網、通信手段、データ同化手法、高性能コンピューター等が必要となっている。現在の天気予報のような形になりつつあるのは、本書にでてきた先人の個々の力、あるいは思いがこういう形に結実したからである。その長い歴史に思いをはせると、感慨深いものを感じる。

(立正大学 吉崎正憲)